

0 1 3
0 1 5
0 1 7

編集長独白
表紙の時計／パルミジャーニ・ラルリエ、トリッククアエストルグループ

Editor's Choice!

ヴァンクリーフ&アーペル、チャームエクストラオーディネールフェサクラウオッチ、ルイ・モネ、メモリーズ、ロジェ・デュブイ、エクスカリバー42 オートマティックスケルトン、オーデマピゲ、ロイヤルオーク、ヴァシュロン・コンスタンタン、パトリモニー、カルティエ、ドライブドゥカルティエ、ウブロ、クラシック・フュージョン、レーシンググレイ、モンブラン、ペリテイジクロノメトリッククロノグラフアニアルカレンダー、WC、ビッグ・パイロット・ウオッチ、パーペチュアル・カレンダー・アントワヌ・ド・サンテグジュペリ

世界は時計で回っている。

ユリスナルダン、ジギス・カーン、ハイジュエリーウエストミンスター・カリヨン・トゥールビヨン・オートマチックミニッツリピーター、ユリスナルダンの近年の歩みを物語るグランド・コンプリケーション・ウオッチ

ハリー・ウィンストン、オーパス14、オーパスに登場したポップで楽しいコンプリケーション・ウオッチ

モンブラン、モンブラン4810 コレクション

創業10周年を迎え、創業者に捧げるコレクションが誕生

ジャケ・ドロー、グランセコンド、デッドビート

今日に甦った18世紀のコンスタントフォース機構

ヴァシュロン・コンスタンタン、オーヴァーシイズ・コレクション

コレクション名にふさわしいワールドタイム・モデルが登場

メートル・デュタン、フライング・アート・チャプター、中国装飾美術とのコラボレーションで新たな章を綴る

シャネル、ムッシュ・ドゥ・シヤネル

シャネルの美学を映し出したメンズ・ウオッチ

「ラルフ・ローレン 2016年新作」

基本を崩さず、裾野を広げた新作コレクション

例年、SIHHで新作を発表してきたラルフ・ローレンだが、今年は東京を皮切りに世界各国での発表となった。レディースを中心にステンレススチール・モデルの買いやすい価格帯のモデルが多く、ラルフ・ローレンの時計も新しい時代を迎えていることを感じさせた。

「ルイ・ヴィトン 2016年新作」

ルイ・ヴィトンのルーツを辿り、「旅人の時間」を多彩に表現

ルイ・ヴィトンはそのルーツにある「旅」をキーワードに時計の開発を行っている。そして今年は2014年に登場した、エスカルがコレクションを充実させ、また新型ケースのGMTモデル、ヴォヤジャーが誕生し、時計の世界を着実に発展させている。

049	2016年ブランド別新作情報（バーゼル編）
	安定した持続を目指した 持ち味の強化
	スイス時計産業の不況が懸念されるなか、3月17日から24日にかけてバーゼルワールドが開催された。大きな話題を呼ぶ新作は数少ないものの、各ブランドはそれぞれの技術力あるいはデザイン力を生かして、アイデンティティが明確なモデルの強化が中心だった。ブランド別に主要な新作を紹介し、各社の傾向をみてみたい。
106	日本市場に再びお目見えしたシドー 控えめなデザインと頑強な自動巻きを貫く中流ブランド
108	カシオ MT-G カシオ Gショック MTG シリーズ Gショック MTG-1000D / MTG-G1000BS / MTG-G1000GB / MTG-G1000AR カシオの「顔」として発展するハイブリッド電波時計 腕時計新着情報
110	ロレックス ユーメントール&プロトジェアート・イニシアチヴ メキシコシティで祝った2014-2015年度サイクルの成果
116	ステラ・タイムピースギャラリー 独立時計師たちの作品との出会いを提供する「時のギャラリー」
118	ヴァンクリーフ&アーペル銀座本店オープン 滑らかな曲線と木のぬくもりに包まれて ブシュロン表参道オープン
120	幅広い世代に向けて扉を開いたジュエラー パネライ ユーダイヴ イントウー タイムズ 展覧会 パネライの過去、現在、未来を巡る展覧会 インフォメーション
121	問い合わせリスト
122	次号予告
124	
128	

ハリー・ウィンストン、オーパス14

オーパスに登場したポップで楽しいコンプリケーション・ウォッチ

昨年10月にドイツのバーデン・バーデンで発表されたオーパス14が日本市場に入荷した。ジュークボックスから着想を得たという、フィフティーズのロックンロールが聞こえてきそうな時計だ。複雑時計でありながら楽しさがあるユニークなオーパスの登場だ。



手巻き式のCal.HW4601(124石、2万8800振動)を望む。ベースは3バレルでシリシウム製のヘアスプリングを搭載したブランパンCal.13RO。そのバレルをひとつ取り外し、残りのひとつは通常の時計(パワーリザーブ約68時間)、もうひとつはファンクション用(ディスク往復5回分)とした。

世の中が大きな節目を超えた2000年から2001年にかけて登場した新作モデルといえば、持ち前のフライン・セラムックス・ケースで一世を風靡したシヤネルJ12、復刻されたパテック・フィリップRef.5110ワールドタイム、フル・モデルチェンジを受けたロレックス・コスモグラフ・デイトナ、トゥールビヨン・ブームの切っ掛けをつくったブレゲ・クラシック・トゥールビヨン

200周年記念モデルなど、枚挙にいとまがない。そう、大成功を納めた秀逸なモデルが多数デビューしたが、ちょうどミレニアムにあたるこの時期なのである。

そして、忘れてはならないのが2001年に発表され、これ以降製作が続けられているハリー・ウィンストンの複雑ウォッチ、オーパスだ。即ち、独立時計師とのコラボレーションによって生

み出されるのがこのオーパス・シリーズの最大の特徴であり、結果的には年ごとに変わるその時計師の顔ぶれも楽しみのひとつとなっていたことは記憶に鮮明に残るものだ。しかし、オーパスの実力は、それだけに留まらなかった。実はその当時、一般の人にとって単に高級ジュエリー・メーカーとしての認識しかなかったハリー・ウィンストンを、高級複雑時計メーカーのポジションにまで一気に押し上げたのが、このオーパスが残した大きな足跡なのである。

そのオーパス・シリーズは、約2年半ぶりに登場した今回の新作モデルで14作目を数えることになった。例年のバーゼル会場ではなく、昨年にドイツで開催された発表会の様子や、このオーパス14のプロジェクトを受け持ったテロス社のジョニー・ジラルダンとフランク・オルニーのふたりについては本誌126号に詳しいのでそちらを参照戴くとして、ここではわが国に入荷したばかりの実機に触れてみたい。

飲食や飲酒、さらにギャンブルなどを楽しむお店のことを1940年代のアメリカではジューク・ジョイントと呼んだが、1950年代から1960年代に全盛期を迎えたジュークボックスは、ここで誕生したミュージック・マシンである。言うまでもなく、コインを投入したのちに希望の曲を選ぶと、45回転のドーナツ盤が1本のアームによって選り出され、曲が自動でスタートする仕組みを備えていたが、その時にアームによって移動する楽しいレコードの動きを腕時計で再現したのが、本機である。

左ページの大きな写真を見て戴きたい。まず時計としての機能は、9時位置の一段飛び出した部分で、時(ジャンピング・アワー)を表示し、分(レトログレード・ミニット)は6時の半円形にオレンジ針で示されるが、秒は装備しない。その分の上のインダイヤルがパワーリザーブ・インジケータで、約67時間のロング・パワー・リザーブのうちの60時間を表示してくれる。



右がデイ&ナイト表示を装備したGMTディスク、左が日とち付けディスクをセットした状態。



つづいて、ジュークボックスに見立てたところのファンクションは、2時位置のサークルに集約される。即ち、星を描いた「スター・ディスク」が現在置かれていたのがそのポジションで、好みによって9時のジャンピング・セコンドの下に収納した「日付ディスク」と「GMTディスク」を選び出し、この場所に移動させることができるのである。アームを使ったその時の動きと、レコードに似せたそのディスクがセット寸前に微妙に回転する様は、ガラス越しにジュークボックスの内側を覗いていた50年ほど前を思いだしてしまつたほどだ。

一連の作動を司るのは、ケース左横に置かれたセレクトターと、4時位置につけられた大型のプッシュ・ボタンで前者で3枚のディスク(スター、デイト、セカンドタイム)の選択をした後、後者のボタンを押すことで機構がスタートする。

初期のオーパスの多くのモデルは、伝統的な時計づくりの要素が強く、しかも複雑な機能を前面に押し出していたものだが、同じ複雑系でありながら、こうした楽しみに溢れたモデルも悪くない、と思わされたのが短時間のインプレッションである。もちろん、その愉しさの中には、ポップでカラフルなオーパス14の卓逸したデザインも含まれている。

1950年代のポップな雰囲気を満載したオーパス14のダイヤルまわり。9時位置がジャンピング・アワーで、その上がテレビ映画「ルート66」のトレードマークを思い出させるマスコット。6時がレトログレード・セコンドとパワーリザーブ計。そして2時がジュークボックスのターンテーブルに相当する部分で、現在は創始者ハリー・ウィンストンのサインが入ったスター・ディスクが収まる。クラウンの下が機構をスタートさせるプッシュ・ボタンで、ケース上部にデイトとGMTの調整ボタンがつく。ケースは直径54.7mm×厚さ21.9mmの18Kホワイトゴールド製で、30m防水機能を有する。50個の限定生産で、価格は5378万4000円。



ケース左側面に取りつけられたディスクのセレクトター。各表示の下側に選択用のスライダーを装備する。

シャネル ムッシュュードゥシャネル

シャネルの美学を映し出したメンズ・ウォッチ

シンプルさのなかにシャネルの個性を宿した新しいメンズ・ウォッチが誕生した。初めて自社で開発し、製造を手掛けるモデルでもある。見た目の美しさを重視したムーブメントのデザイン、数字へのこだわりから選択されたジャンピングアワーがシャネルの美学を反映している。



直径40mmの18Kベージュゴールドのケースもこのモデルのために新しくデザインされた。オパールアイボリーカラーの文字盤の6時位置に設けられた小窓はパリのヴァンドーム広場を模っている。これはシャネル最初の時計、「ブルミエール」のケースのフォルムに通じる。ベージュゴールド製のリュウズにはライオンのエンブレムが刻まれる。3気圧防水。価格426万6000円。今夏発売予定。



パリにあるシャネル ウォッチ クリエイション スタジオが外装、数字のフロント、ムーブメントのデザインを担当した。

1987年、オートクチュール・メゾンのシャネルが時計の世界に進出した。シャネルNo5のボトルストッパーとヴァンドーム広場をモチーフとしたレディ・ス・ウォッチの「ブルミエール」の登場だった。このモデルはシャネルのアイコンとして今日も重要なコレクションとなっている。しかしシャネルの時計を一般に広めることに役買ったのはJ12であることは言うまでもない。2000年に登場したJ12はシャネルにとってのみならず、時計の外装素材としてのハイテクセラミックスの存在を広く認知させた点でも時計業界で大きな役割を果たしたといえるだろう。また男性にもシャネルを身に着けるチャンスを提供し、その時計を飛躍させることとなった。

そして今年のバーゼルワールドで男性のためのモデル「ムッシュュードゥシャネル」が発表された。今までオーデマピゲル・ノーマン・パピの協力を得て、J12レトログラードミステリユーズ（2010年）や「ブルミエール」フライングトゥールビヨン

（2012年）、J12フライングトゥールビヨン（2014年）が登場してきたが、この新作は初めて社内開発を手掛けたもので、シャネルの時計に新しい扉を開いた。

1993年、シャネルはラ・ショー・ド・フォン（スイス）にある時計ケースやブレスレットの専門メーカーで、宝飾加工技術にも優れたG&Fシャトランの株式を100%取得して、傘下に置いた。G&Fシャトランが「ブルミエール」のケース製造を担っていたことがきっかけだったという。今日ではハイテクセラミックスのケースやブレスレットの製造のほか、金属パーツの製造、そしてケーシングもこの工房で行い、シャネルの時計製造の拠点となっている。

2011年、ムーブメントの設計や製造、品質管理などに関わる人材を集めて、G&Fシャトラン内に8名から成るオートロジュリー部門が設立された。これは自社ムーブメントの開発を目的としたもので、パリのシャネルウォッチクリエーションスタジオとの連携で、外装とムーブメントの開発に着手した。

こうしてジャンピングアワーとレトログラードミニッツの「CHANEL」キャリバー1、ジャンピングアワーを搭載した「ムッシュュードゥシャネル」が誕生した。ジャンピングアワーを選択した理由をシャネルは次のように述べている。「構想

のベースは数字のシンボリズムです。シャネルNo5に象徴されるように、シャネルにとって数字は非常に重要な意味をもっています。そこで数字による時刻表示は当然の流れでした。シャネルのクリエイションスタジオでは新作のために数字の新しいフロントを開発した。また男性らしい強さを表現し、自社製ムーブメントを示すライオンのモチーフもデザインされた。

ブラックのADLC加工が施されたムーブメントは二重香箱で約3日間のパワーリザーブをもつ。また240度のレトログラードの分針は逆行が可能だ。

ムーブメントの組み立てとケーシングはG&Fシャトランの工房で行われるが、ヒゲゼンマイや主ゼンマイ、ルビーなどを除いてムーブメント部品の多くはローマン・ゴティエに委ねられている。ローマン・ゴティエは2005年に精密機械のエンジニアであるローマン・ゴティエ氏によってル・サンティエ（スイス）に設立された部品メーカーだ。今日では年間60個ほどの自社ブランドの高級時計も製造しているが、他ブランドへの部品供給が主軸となっている。シャネルは自社ムーブメントの製造を目的に、2011年にこの工房に資本を投下した。

シャネルが開けた時計製造の新しい扉の奥で、今後、どのようなクリエイションが展開されるかが注目される。



サファイアクリスタル・バックを通して見る手巻きムーブメントの「CHANEL キャリバー1.ジャンピングアワー」（直径40.7mm、厚さ10.4mm、30石、毎時2万8800振動、パワーリザーブ約3日間）。170個の部品で構成され、シャネルを象徴するカラーであるブラックのADLC加工が施されている。テンプレートの右側にあるパーツにはリュウズと同様に力強さとパワーを象徴するライオンのエンブレムが刻まれる。

BLANCPAIN

ブランパン

📍ブランパン ブティック銀座 📞03-6254-7233

60年を経てもテントウムシの愛らしさは変わらない

誕生60周年を迎えた“レディバード”が今年の新作の主役となった。「テントウムシ」を意味するレディバードは1956年に直径11.85mmのCal.R550を搭載して発表された。その後、1995年には自動巻きのCal.615が登場し、今日ではこれに改良を加えたCal.6150が採用される。女性用モデルも大型化する傾向があるなかで、直径21.5mmという小ぶりのサイズを保ち続け、毎年新作が登場する。今年の写真にあるモデルのほか、セント バレンタインモデルなど4型が発表された。マザー・オブ・パールの文字盤にダイヤモンドやルビーをセットし、またハート型のチャームを付けるなど、それぞれに女性らしい装飾が施される。



フィフティ ファゾムス パチスカーフ

“フィフティファゾムス パチスカーフ”コレクションに加わった新作で、グレーのプラズマセラミック・ケースは2014年に限定で発表された“オーシャン コミットメント パチスカーフ フライバック クロノグラフ”に次いで2作目だ。逆回転防止ベゼルもケースと同様で、リキッドメタルで目盛りを記したブルーのセラミック製リングを備えている。既存モデルと同じく、自動巻きのCal.1315(35石、毎時2万8800振動、パワーリザーブ約120時間)。シリシウム製ヒゲゼンマイを)を搭載する。300m防水。予価138万2400円。今秋発売予定。

ヴィルレ 8デイズ マニュアル ユニークピース

昨年の「シャクドー ガネーシャ モデル」に続くメティエダールの新作で、葛飾北斎の「神奈川沖浪裏」に着想を得たものだ。メキシコ産の銀黒曜石をベースとする文字盤にはわずかに緑がかった古色を帯びた波があしらわれる。これはホワイトゴールドで作った波のモチーフを赤銅の上に固定して緑青液に浸すことで得られる色合いだ。裏蓋側にパワーリザーブ表示を備えた、手巻きのCal.13R3A(28石、毎時2万8800振動、パワーリザーブ約192時間)を搭載する。ケースは直径42mmのプラチナ。予価1801万4400円。今秋発売予定。

レディバード

1956年に登場した小型のラウンド・ケースの女性用モデル“レディバード”の60周年を記念した新作。32個のダイヤモンドをセットしたベゼルを備える、直径21.5mm、厚さ8.23mmの18Kホワイトゴールドのケースに自動巻きのCal.6150(直径15.7mm、厚さ3.9mm、29石、毎時2万1600振動、パワーリザーブ約40時間)を搭載する。マザー・オブ・パールの文字盤には中心から外へ広がる波模様が手作業で刻まれ、8個のダイヤモンドがインデックスにセットされる。サファイアクリスタル・バック。予価203万400円。今秋発売予定。

BR S ダイヤモンド イーグル ダイアモンズ

BRシリーズのなかで最も小ぶりの39mmケースのBR Sコレクションにダイヤモンドをセットした文字盤のレディース・モデルが加わった。7個のダイヤモンドはわし座を表現している。この星座はギリシャ神話では「ゼウスが敵を倒す雷の矢を運ぶ使者」といわれ、威厳を象徴する。またその一等星、アルタイルは中国では“牽牛星(彦星)”と呼ばれ、七夕を想起させるロマンチックな星でもある。ステンレススチール製ケースにクォーツを搭載する。10気圧防水。予価88万5600円。6月発売予定。ケースにダイヤモンドをセットしないモデル、予価37万2600円もある。

BELL & ROSS

ベル & ロス

📍オールブルー 📞03-5977-7759

多面的にブランドのステップアップを図る

昨年、10周年を迎えたスクエア・ケースの“アビエーション”のなかでBR-X1シリーズは上位コレクションだが、今年はブランド初のサファイアクリスタルのケースのモデルが登場した。ケースのみならず、ムーブメントもMHCの協力を得て新しく開発された意欲作で、ブランドとしての発展を感じさせた。また女性に向けた小ぶりのBRSには文字盤にダイヤモンドで装飾を施したクォーツ・モデルが登場し、女性への浸透も図られている。このほかバーゼルワールド開幕前にルノー・スポール・フォーミュラ1チームへの協賛を発表するなど、ミリタリーのイメージから脱却し、多方面で積極的な動きが見られる。



BR-X1 スケルトン クロノグラフ ハイバーステラ

2014年に発表されたBR-X1のスケルトン・クロノグラフのバリエーションで、ブルーはNASAの宇宙服のパーツから着想を得たという。ケースはチタニウム製で、ベゼル周囲のブルーの部分とタキメーターを刻んだフランジ、そして9時位置の30分計のディスクには軽量なアルミニウムが使われている。ムーブメントはデュボアデブラ製のDD2162をベースとする自動巻きクロノグラフ、BR-Cal.313(56石、毎時2万8800振動、パワーリザーブ約40時間)を搭載する。ケースは45mm×45mm、10気圧防水。予価270万円。限定250個。9月発売予定。

BR-X1 トゥールビヨン クロノグラフ サファイア

アヴィエーションをテーマとするBRシリーズの最高機種“BR-X1”コレクションにベル&ロス初のサファイアクリスタル・ケースのモデルが登場した。BR-X1は2014年に誕生し、昨年にはフライング・トゥールビヨンを装備するクロノグラフが発表されたが、この新作には前作と異なり、MHCが開発した6時位置にフライング・トゥールビヨンを備える、手巻きのモノプッシュクロノグラフ・ムーブメント、BR-Cal.285(35石、毎時2万1600振動、パワーリザーブ約4日間)が搭載される。ケースは45mm×45mm。予価6696万円。受注生産。

カシオGショックMTGシリーズ

MTG-G1000D／MTG-G1000BS／MTG-G1000GB／MTG-G1000AR

カシオの「顔」として発展するハイブリッド電波時計

2014年のバーゼルワールドでコンセプト・モデルとして発表されたハイブリッド電波時計は、今日では、Gショックと、オシアナスで多くのモデルを展開する。ここではカシオ独自のハイブリッド電波時計をGショックに特化して紹介しよう。

まずは簡単なおさらいから始めよう。

1993年に発売された電波式腕時計は、クォーツをベースに外部からの時刻情報を得て日に1回修正を行い、常に正確な時刻を表示してくれる便利な時計である。言い換えればこれは長い時計史上初となる画期的なシステムであった。

しかし、当然のことながら、その恩恵

を得ることができるのは時刻情報を載せた、地上電波が飛んでいる範囲内に限られており、また、腕につけている状態ではこの時刻電波を拾えないという小さな欠点があった。

これに対して、2011年に登場したGPS電波式腕時計は、GPS（グローバル・ポジショニング・システム）電波から時

刻情報を取得する最新のモデルであり、世界中どの場所でも、また腕につけていても受信が可能という特徴を備えている。

だが、こちらにも些細な欠点が存在しており、GPS電波の届かない室内などでは受信することができない。

こうしたそれぞれの欠点を一気に解消したのが、2014年に登場したカシオのハイブリッド式電波時計である。状況に応じて標準電波とGPS電波の両方が受信可能な、このコロンプスの卵のような新システムは、見事に互いの欠点を補い合ってしまったが、別の見方をすれば、現段階における理想的な電波時計と言っても差し支えないだろう。

MTG-G1000D

その唯一無二であるカシオのハイブリッド式電波時計は2015年9月にリニューアルを行い、第2世代へと突入した。これが現在のGショック・シリーズの上級を担当する、MTG-G1000Dである。

このモデルではケース&ブレスレット

のメタル化（ステンレス・スチール・ケース+樹脂製パーツ）が進められ、グレート・アップすると同時に、文字盤の視認性や各部の操作性が高められたのが特徴だ。とくにダイアルまわりのデザインは多少なりともすっきりとし、各ファンクションの読み取りが格段に優れたものとなった。いっぽう、機構面ではソーラー・パネルの発電量が1.2倍以上向上するとともに、針セッティング時の速度アップが図られ、相対的に使い易さが増した。

MTG-G1000BS

その後、GショックMTGシリーズは機構面をそのままに、ディテールの違いによるバリエーションの拡大が図られる。はじめにお目見えしたのは、2015年11月にデビューしたヴィンテージ仕様のG1000BSである。このモデルは従来のステンレス・スチール製のケース&ブレスレットに、エイジド加工と呼ばれる、使い込まれた、独特の雰囲気を加味しているのが大きな特徴で、イエローゴ



現行GショックMTGシリーズの基本モデル、MTG-1000D。ステンレス・スチール製で、写真はコーポレート・カラーであるブルーの刺し色を使った代表的なモデル。価格は17万2800円。



この7月に発売となるMTG-G1000AR。写真下右側のヴィンテージ仕様、MTG-G1000BSのイエローゴールド・カラーをローズゴールド・カラーに置き換えた新作モデル。価格は23万7600円。

搭載されるモジュールに変更はなく、ワールドタイマーとクロノグラフのほか、アラーム、カウントダウン・タイマー、LED照明を搭載する。超大型のケースは直径54.7mm×厚さ16.9mmで、198gの重量と20気圧の防水機能をもつ。強制受信が可能なGPS電波は通常の時刻に加えて、多局を受信することで位置情報を知ることが可能。標準電波は日本2局、欧2局、米、中国に対応しており、夜間に自動受信のみが行なわれる。受信が出来なかったときの精度は搭載されるクォーツに準じており、平均月差±15秒が確保される。



昨年、MTGシリーズのバリエーションに加わったふたつのモデル。右がエイジング加工を施したMTG-G1000BSで、左がMTG-G1000GB。ともにステンレス・スチールがベースに使われており、前者はイエローゴールド・カラーとブラックの2層のPVD加工を施した後、上層の一部を削り取ることで、独自の風味を生み出している。後者は硬度の高いDLC加工が施されたモデル。それぞれ価格は23万2200円と21万6000円。

ールド・カラーとブラックの色合いがミックスされる。なお、この仕上げは、ブレスリリスには「過酷な環境に耐えるGショックのタフネス・スピリットを表現した」ものと謳われた。

MTG-G1000GB

続いて2015年12月に登場したのは、ステンレス・スチールにDLC加工を施したブラック・モデルである。カシオでは2004年にデビューしたMRG2100で初のDLCモデルを披露しているが、一般にSSに比較すると6倍以上のヴィッカーズ硬度をもつ同加工は魅力的な要素のひとつとして、これまでも多用されている。他方、ブラックのダイヤルに、ゴールド・カラーのフランジやブッシャーなどを配したケースまわりは、オリジナルのMTG-G1000Dと比較すると一段と精悍さが際立ってみえる。

MTG-G1000AR

今年のバーゼルワールドでデビューし、この7月に発売されるのが、最新のG1000ARである。同じくヴィンテージ加工が施されたG1000BSとの最大の違いは、これまでのイエローゴールド・カラーに代えてローズゴールド・カラーが採用されたことだ。エイジド加工自体に大きな変更はなく、ケースまわりではゴールド・カラーPVD処理とブラックPVD処理を順に行ったのち、上側のブラックの一部を剥離させて独自の風合いを出している。

独立時計師たちの作品との出会いを提供するギャラリー

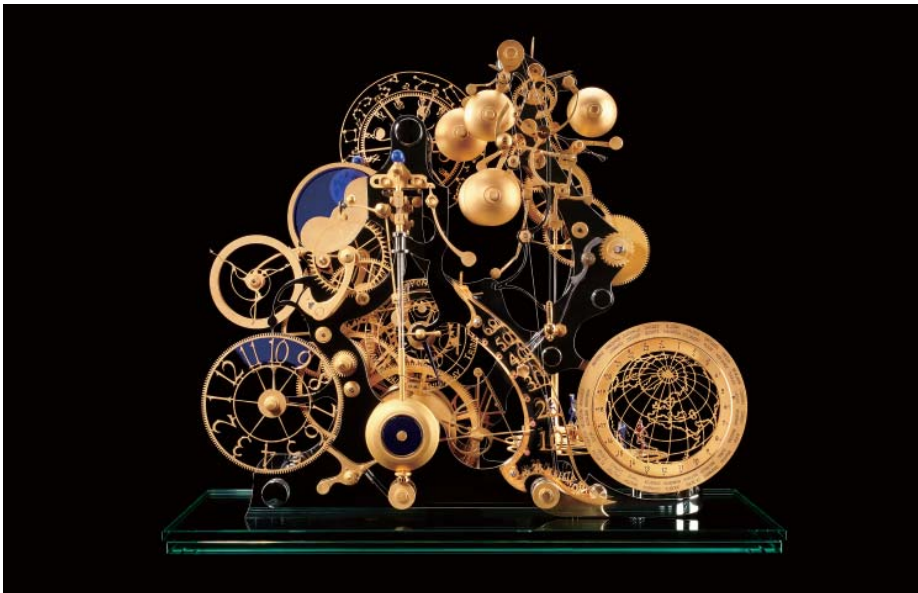


「ステラ・タイムピースギャラリー」。印象派などの絵画が飾られた満洒なギャラリーのなかで、時計たちが静かに時を刻んでいる。独立時計師たちの作品はそれぞれ2〜3点が常時展示される。またアンティークの懐中時計や希少なアンティーク・ジュエリーも扱われている。

予約の受付およびお問い合わせは
☎03-6264-5808あるいは
WEBサイト stella-polare.co.jp まで。



ミキ・エレッタ氏の「トレスカラコロレス」（3匹のかたつむり）。2014年の作品で、ワールドタイム機能、ムーンフェイズ、星座表示を備える。またミュージカル機能が作動すると、7人のダンサーと4人のミュージシャンが約10秒間のショーを繰り広げる。幅約390mm、高さ約350mm、奥行約125mm。価格4644万円。



東京・銀座は「時計の街」でもある。時計専門店の老舗や時計・宝飾ブランドのブティックが軒を並べ、さらに百貨店の時計売り場を加えれば、主要ブランドの時計を見ることには困らない。しかし時計専門誌などで取り上げられる独立時計師の作品となると、話は異なる。年間にごく限られた数だけを作る彼らの時計を正規で輸入する代理店はなく、日本の時計愛好家たちが国内で入手する機会は皆無に近いと言っている。

ところで今年初め、銀座に「ステラ・タイムピースギャラリー」がオープンした。ここで取り扱う時計が、今まで日本で手にとる機会がなかった独立時計師たちの作品だ。現在、独立時計師協会に所属する6人の作品を扱い、ここに掲げた時計はいずれもギャラリーで展示、販売されている。

旧ユーゴスラビア（現ボスニア・ヘルツェゴビナ）出身のキネティック・アーティストのミキ・エレッタ氏は「時」を動きと音で表現する、美しく楽しいクロックの製作で異才を発揮している。クリスチャン・ヴァン・ダー・クラウ氏は天文時計で知られるオランダの時計師だ。天体の動きを腕時計のなかで正確に再現す



アントワヌ・プレジウソ氏の「ミステリー ミニッツ リピーター」。2008年の作品で、1900年代のジャガー・ルクルト製ミニット・リピーターのエボウシュを完全に修復したムーブメントを搭載。ミニット・リピーターの作動は1991年にプレジウソ氏が特許を取得したベゼル回転式を採用。純銀製ケース。45×45mm。価格応談。



ベアト・ハルディマン氏の「ハルディマン H1 フライング・リラ セントラル トゥールビヨン」。2002年のパーゼルで発表された同氏の代表作だ。直径31.58mmの文字盤の中央で、直径17.80mmの大型ケージのフライング・トゥールビヨンが60秒で1回転する。ケースは直径39mmのPt950製。価格2700万円。



るメカニズムの開発の第一人者で、有名ブランドの時計製作にも関わっている。このほか複雑時計の機構開発で知られるスヴェン・アンデルセン氏、セントラルトゥールビヨンのベアト・ハルディマン氏、昨年のジュネーブ・ウォッチ・グランプリで、トゥールビヨン・オブ・トゥールビヨンズがふたつの部門で賞を獲得したアントワヌ・プレジウソ氏、そして独創的な時刻表示機構を開発したルドヴィック・バルアー氏の作品が揃う。特別注文やカスタマイズのリクエストにも応じている。

なお完全予約制のため、事前に電話あるいはウェブサイトを通しての連絡が必要だ。

(T・K)



クリスチャン・ヴァン・ダー・クラウ氏(右)の「プラネタリウム」。1999年に発表された自動巻き時計で、アヴェンチュリンガラスの文字盤の6時位置では水星、金星、地球、火星、木星、土星の6つの惑星の動きが正確に再現される。ケースは直径40mmの18KVG製。価格1026万円。写真の左はCEOのダニエル・レインジェス氏。



スヴェン・アンデルセン氏の「セキュラー パーペチュアル カレンダー」。2005年発表。グレゴリオ暦の閏年のふたつの例外、すなわち「西暦が100で割り切れる年は平年とする」と「400で割り切れる年は閏年とする」に対応し、通常の永久カレンダーと異なり2100年に修正の必要がない。直径40mmのPt950ケース。価格1058万4000円。



ルドヴィック・バルアー氏の「アップサイド・ダウン シリアルナンバー-3/12 ゴールドケース」。2010年に発表した同氏初の作品。手巻き時計で、現在時刻を示す数字以外は天地が逆になっている。毎正時に達するとふたつの数字が瞬時に回転し、前の時刻の数字は逆になる。直径41mmの18KRGケース。価格972万円。